

感染症定期報告感染症別文献一覧(2010/4/1~2010/7/31)

資料 4-1

ID	感染症(PT)	出典	概要
1	B型肝炎	Transfusion 49(12): 2774-2776; 2009 December	日本人献血者のB型肝炎セロコンバージョンについて調査を行うため、2006年10月-2007年9月にHBs抗原がセロコンバージョンを起こした献血者48名を特定し、最後に血液が陰性であった時点から最初に陽性となるまでの期間につき、年齢、性別、HBV遺伝子型およびIgM型抗HBc抗体によって分析した。中央値は332日でこれまでの報告よりも長く、他国との献血基準の違いが考えられた。また、中央値はHBV遺伝子型によって異なり、GenotypeA(いずれもAe)献血者では161日、GenotypeB献血者では602日、GenotypeC献血者では357日であり、実際の日数を献血可能期間で除した場合、GenotypeAの比率はGenotypeCより有意に低かった。
2	B型肝炎	FDA/CBER Guidance for Industry 2010 May	2010年5月、FDAは抗HBc抗体の検査の結果、供血延期となった献血者の再登録に関する再検査方法について、ガイダンスを発表した。 A. 抗HBc抗体が2回以上繰り返し陽性のため、供血が無期限に延期となった献血者については、1)繰り返し陽性反応の最後の検査から最短8週間後の当該献血者の追跡検査において、FDA承認の検査で、HBs抗原、抗HBc抗体及びHBV NATが陰性である場合、及び2)当該献血者の献血前の血液検体において、FDA承認の検査で、HBs抗原、抗HBc抗体及びNATが陰性であり、当該献血者が全血及び血液成分の供血者として適合基準に全て適合している場合、ドナープールに再登録できる。 B. 抗HBc抗体が2回以上繰り返し陽性のため、供血延期となった献血者の検体もしくは献血検査が1)HBs抗原検査で繰り返し陽性である2)抗HBc抗体検査で繰り返し陽性結果である、又は3)HBV NATで陽性である場合には、その献血者の供血を無期限に延期しなければいけない。 C. 抗HBc検査結果によって供血延期となった献血者に追跡検査の実施を希望する場合、8週間の待機期間が終了する前に、追跡検査を実施してよい。HBs抗原、抗HBc抗体及びHBV NATのすべてが陰性結果である場合のみ、再登録の資格を得る。8週間の待機期間中に、HBs抗原、抗HBc抗体及びHBV NATのいずれかの結果が陽性の場合、再登録は不適合であり、供血を無期限に延期することを推奨する。
3	E型肝炎	XIVth Regional Congress of the ISBT, Asia; Nov 14-18, 2009; Nagoya (International Society of Blood Transfusion Vox Sanguinis 2009; 97, 17) (2A-S02-03).	HEV(hepatitis E virus)陽性血液の輸血を受けた受血者のルックバック調査から、血液製剤中のHEV高値(>5.4log/bag)がウイルス伝播に関連付けられると考えられた。日本赤十字社では北海道においては、HBV/HCV/HIV-1に加えてHEV NATスクリーニング検査を行っているが、2005年1月-2006年3月には検査結果が判明する前に輸血が行われた場合があった。過去の供血保管検体のルックバック検査により、HEV陽性血液製剤の輸血を受けた13例が判明したが、HEV感染の徴候を示した4例中3例がE型肝炎を発症し、1例は一過性のATL上昇を示した。輸血された4製剤のHEVウイルス量とgenotypeは5.4(G4), 5.5(G3), 5.8(G4), 6.8(G3)log/bagであり、HEV感染を起こさなかった4例へ輸血された4製剤では、<4.4(G3), <4.4(G3), 4.3(G4), 5.5(G3)log/bagであった。genotype4は3より毒性が高い可能性が示唆された。
4	E型肝炎	日本ウイルス学会第57回学術集会(2009 October 25-27)1P153	サルにおけるE型肝炎ウイルス(HEV)の感染状況を調べるため、2004-2008年にマカク属サルの9コロニーから定期検査において採集した血清535検体を用いて、HEV特異抗体検査および(HEV陽性の場合に)nestedPCRを用いたHEV遺伝子の検出を行った。HEV抗体は、2004年採集については検出されず、2005年採集では計25頭のサルからHEV IgG抗体が検出され、2006年採集では抗体が検出されなかった1群以外は陽性を示し、全体の抗体保有率は79%に達した。2007年のIgG抗体の高い検体につき遺伝子検査を行った結果、3検体からHEV遺伝子を検出し、遺伝子型はいずれも3型であった。過去5年間の観察結果より、HEVは自然環境でもサルに伝播し、最初の感染は2004-2005年に発生し、他のコロニーへ伝播したことが推測された。
5	HTLV	XIVth Regional Congress of the ISBT, Asia; Nov 14-18, 2009; Nagoya (P-141) (International Society of Blood Transfusion Vox Sanguinis 2009; 97 (suppl.1) 119)	HTLV-1(Human T-cell lymphotropic virus type 1)抗体陽性献血者のプロウイルス量の定量と輸血感染症の感染性ウイルス量の評価について報告された。プロウイルス量はHTLV-1抗体陽性献血者から白血球除去前に採取した血液検体の末梢血単核細胞または凝固血液由来DNAを用い、TaqManPCR法によって細胞内DNA量として定量された。輸血感染症の感染ウイルス量は、過去のデータで抗体陽性献血者由来の赤血球濃厚液1単位の輸血を受けた患者の約90%にセロコンバージョンが認められたことから、血液検体の80%に感染リスクがあると仮定し、推定された。その結果、HTLVプロウイルス量は白血球100細胞あたり0.01~4.9コピー(平均0.83)であり、評価された血液検体の80%に、少なくとも白血球100細胞あたり0.06コピーのHTLVプロウイルスが含まれていた。赤血球濃厚液1単位あたりの白血球数を 1×10^8 数(白血球除去前)と仮定すると、輸血感染を生じた製剤には少なくとも 6×10^8 数の感染細胞が含まれる。2007年、日本の全血液製剤に対して保存前に白血球除去が実施され、99%の製剤において、残存白血球数は 1×10^8 数と確認されている。仮に血清学的スクリーニングが未実施の場合でも、血液成分中のHTLV-1感染細胞は多くて 4.9×10^4 数と考えられ、推定される感染ウイルス量はかなり少ない(6×10^8 感染細胞)ことから、血清学的スクリーニングと白血球除去によって事実上輸血感染リスクは排除されていることが示されたと説明している。

6	HTLV	51st ASH Annual Meeting and Exposition; 2009 Dec 5-8; New Orleans.	長崎市におけるHTLV-1(human T-cell lymphotropic virus type 1)の感染率とATL(adult T-cell Leukemia/Lymphoma)の発症率を、(献血者からではなく)2000-2007年に長崎大学病院を受診した患者(10,261名)のHTLV-1抗体検査データおよび長崎県がん登録された長崎市内で診断を受けたATL患者(360名)のデータから評価した。その結果、患者10,261名中HTLV-1抗体陽性者は1,392名(男性:653、女性:739)、陽性率は13.57%であり、女性が有意に高かった。HTLV-1キャリアの大まかな生涯ATL発症リスクは男性7.29%、女性3.78%と推定され、また、出生年別の抗体陽性率および年間HTLV-1キャリア推定人数からキャリア10万人当たりの年間ATL発症率を推定した。本調査の出生年別HTLV-1抗体陽性率は過去に報告された供血者の陽性率と比べて約50%高く、また、過大評価の可能性はあるが、長崎市において高齢者のHTLV-1キャリアの大規模集団が存在することが示唆された。
7	レトロウイルス(XMRV)	PLoS ONE 5(1): e8519. doi:10.1371/journal.pone.0008519.	2009年10月に米国で報告されたCFS(Chronic Fatigue Syndrome)患者101名のうち68名に(これまで前立腺癌との関連が示唆されている)新規ガンマレトロウイルスXMRV(xenotropic murine leukemia virus-related virus)を検出し知見を受け、英国においてCFS患者186名の血液試料からDNAを抽出し、nestedPCRによりXMRVのスクリーニングが行われた。DNA調整の品質確認には細胞内β-グロブリン遺伝子が増幅され、またネガティブコントロール(水)およびポジティブコントロール(XMRV感染子クローン)も実施された。186例試料すべてにおいてβ-グロブリン遺伝子は増幅されたが、XMRVおよび(関連性の高い)MLV(murine leukemia virus)は検出されなかった。英国においてはCFSとXMRVの関連を示す証拠は見つからなかったが、北米と欧州ではXMRV有病率に集団差がある可能性があり、(これまで)二つの米国グループは前立腺癌組織にXMRVを検出し、二つの欧州の研究では検出されなかった事実もこの可能性を説明するかもしれない。
8	レトロウイルス(XMRV)	ProMED-mail 20100406.1100	XMRV(xenotropic murine leukemia virus-related virus)とCFS(chronic fatigue syndrome)との関連については、健康人の血中に測定可能なレベルでXMRVが検出されている一方で、他の研究ではCFS患者の血中からXMRVは検出されず、いかにウイルスが伝播するか、XMRVが病気の原因であるかは不明である。ウイルスを検出する有効な検査を見つけ、有病率を決定するために努力がなされ、(FDAやCDCなどの政府機関と共に)NIH(National Institutes of Health)のワーキンググループによって調査中である。現在、12の検査が血液供給への感染因子混入を防ぐために行われているが、XMRVを検出するためのFDAに承認された検査はなく、診断基準を設定中である。
9	レトロウイルス(XMRV)	BMJ 340 2010 April 17 (c1974)	カナダでは、CFS(Chronic fatigue syndrome:慢性疲労症候群)の既往歴のあるヒトからの供血を予防措置として2010年5月から禁止することが公表され、この措置を執るのはカナダが世界で初めてである。この決定には、2009年10月に発表されたCFSとレトロウイルス(XMRV: xenotropic murine leukemia virus related virus)との存在に関連性を示唆した報告(Science 2009;326:585-9)が引用され、この試験ではCFSの患者から血中単核細胞を調査した結果、患者群では101例中68例(67%)にXMRV由来DNAを検出し(健康者対照群では218例中8例(3.7%)、また、患者由来のXMRVは感染性があり、ウイルスを介した感染および細胞性感染の両方の可能性が示された。更には、CFS患者由来の活性化PBMC、B細胞、T細胞もしくは血漿に曝露された後、非感染初代培養リンパ球および指標細胞培養系には二次感染が認められたことが、XMRVがCFSの一病原因子である可能性を示唆する根拠となっている。しかし、このウイルスが実際に患者においてCFSの原因となっているか、ウイルスは正常(intact)で感染能力があるのかが不明であり、特に供血システムへのリスクについては計のままである。XMRVが更に解明され、CFSや関連疾病におけるウイルスの関与についてより理解されるまで、今回の供血延期を介した血液供給の安全措置を行うが、更なる知見が集まった時点で、この無期限の供血延期の正当性をもう一度判断する。
10	インフルエンザ	日本ウイルス学会第57回学術集会(2009 October 25-27) p.177 2A01	タイ国中央部(3県7農場)におけるブタインフルエンザウイルス(SIV)の浸潤状況を調査する目的で、臨床で健康なブタから鼻汁および鼻粘膜ぬぐい液を採取し、それぞれH1N1-H3N2亜型SIVに対する抗体保有率およびSIV分離・塩基配列決定を調べた。肥育ブタからH1N1亜型ウイルス1株、子ブタからH3N2およびH1N1亜型ウイルスが各々1および3株分離され、いずれも2000-2005年にタイで流行したSIVと近縁であった。また、母ブタ群の抗体保有率は1年を通して他群(肥育ブタ・子ブタ)より高く、母ブタが農場内の循環に関与している可能性が示唆された。
11	インフルエンザ	ProMED-mail 20091022.3635	大阪におけるパンデミックインフルエンザH1N12009:発生日 2009年10月2日、最初の確定日 2009年10月21日、報告日 2009年10月21日、原因 パンデミックインフルエンザH1N12009、2009年10月2日に大阪でパンデミックインフルエンザH1N12009のアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ1000頭、確定例はブタ10頭、死亡0頭であった。日本でブタがインフルエンザH1N12009に感染した最初の報告である。臨床症状を示さないブタから無作為にブタ鼻汁スワブ10サンプルが集められ、そのプールからウイルスが分離され、サブタイプH1およびN1が確認された。農場は(ブタの)移動を自粛し、半径10km以内のブタに異常は認められていない。

12	インフルエンザ	Virology Journal 2009; 6: 180 (doi: 10.1186/1743-422X-6-180)	2008-2009年冬にスウェーデンで最初にH1N2ブタインフルエンザが診断されたが、そのブタ群からH1N2サブタイプインフルエンザウイルスのリアソータントを特定した報告である。ヨーロッパH1N2ブタインフルエンザウイルスの殆どはこれまで、ヒト様H1N2/SIVのHA(haemagglutinin)とヨーロッパH1N2もしくはH3N2/SIV様ウイルスのどちらかのNA(neuraminidase)を保有しているが、このスウェーデンで分離された株はトリ様SIV HAおよびH3N2/SIV様NAを保有している。このH3N2/SIV様NAは、ドイツ分離株に認められる過去10年間に分離されたH1N2ウイルスの起源であるH3N2のNAと比べ、80年代初期に分離されたH3N2/SIV NAにより近く、両者は独立してCNAを獲得したことを示唆している。このウイルスの内在遺伝子(internal gene)は、トリ様SIV H1N1起源であることが示された。
13	インフルエンザ	ProMED-mail 20100116.0189	米国CDC(Centers for Disease Control and Prevention)は2010年1月15日に、新しいブタインフルエンザによるヒト感染例を報告した。アイオワ州の小児は2009年9月にブタインフルエンザウイルスH3N2に感染したが、11月まで表面化しなかった。少年は入院も必要とせず、十分に回復した。本例ではウイルスの広がりはなく、また、ヒト-ヒト間の感染を疑う根拠はなかった。当該少年が感染した経緯は不明であり、ブタとの接触は知られていない。
14	インフルエンザ	ProMED-mail 20100302.0689	中国香港大学は定期インフルエンザウイルスサーベイランスでブタインフルエンザウイルスとパンデミックH1N1ウイルスのリアソータントを検出した。当該サーベイランスでの検出は初めてであるが、世界中で同様な検出がされている。また、このリアソータントはヒトでは検出されておらず、現時点では香港の集団には出現している兆候はない。引き続き、養豚場の監視およびブタの健康状態のモニターが続けられる。
15	インフルエンザ	Bloomberg News (2009 September 29)	オーストラリアおよびニュージーランドの医師は、ブタインフルエンザ感染の最も危険な状態は、感染によって肺に炎症が生じ、液体が貯留し、機能不全になった場合であることを見出した。ウイルスに感染しても命の危機に瀕する疾病に発展するヒトは少数であり、パンデミック株に由来する三大合併症の最大の共通点は、インフルエンザA関連急性呼吸器疾患候群もしくはflaardsであると説明した。Flaardsは多臓器不全と関連することもあり、死亡と最も高い関連がある。Flaardsに罹る多くの患者は若者でこれまで健康であり、オーストラリアでは、季節性インフルエンザによる死者の年齢中央値は83歳であるが、新型H1N1ウイルスでは51歳であると報告された。
16	インフルエンザ	Canadian Press (2010 January 15) (Yahoo news)	米国CDC(Centers for Disease Control and Prevention)は2010年1月15日に、新しいブタインフルエンザによるヒト感染例を報告した。アイオワ州の小児は2009年9月にブタインフルエンザウイルスH3N2に感染したが、11月まで表面化しなかった。少年は入院も必要とせず、回復した。本症例ではウイルスの広がりはなく、また、ヒト-ヒト間の感染を疑う根拠はなかった。当該少年が感染した経緯は不明であり、ブタとの接触は知られていない。
17	インフルエンザ	ProMED-mail 20100305.0734	「季節性インフルエンザウイルスのヘマグルチニンとノイラミナーゼを含む3種再集合体ブタインフルエンザA(H1N1)のヒト感染」についての報告がJournal of Infectious Diseases 2010; 201に発表された。パンデミックH1N1 2009株とは異なるブタ起源であるインフルエンザA(H1N1)ウイルスの再集合体が患者3例から分離され、この3名はカナダ・Saskatchewanの同じ大規模ブタ作業場で働いていた。ノイラミナーゼおよびヘマグルチニン遺伝子がヒトH1N1ウイルスから判明し、A/Brisbane/59/2007と密接な関連があった。
18	新型インフルエンザ(H1N1)	ABC Newsletter #38. 2009 Oct 23: 13-14.	欧州連合の血液規制委員会(Blood Regulatory Committee)は、H1N1インフルエンザパンデミックが血液供給に不足をもたらすとの報告があることから、血液供給を十分確保するために2つの規制を緩和する事を検討している。欧州各国の代表は、深刻なパンデミックにより10-15%の輸血用血液が不足となる事を懸念している。委員会はEBA(European Blood alliance)、欧州内のassociation of national suppliers and regional alliancesおよび各国規制機関(Competent Authority)に出席を依頼し、安定供給を維持するためにどの規制を緩和するか検討した。インフルエンザ様症状回復後の献血延期期間の短縮(14日から7日もしくは5日へ)およびヘモグロビン値の基準の緩和(女性: 12.5から12g/dLへ、男性: 13.5から13g/dLへ)を検討している。
19	新型インフルエンザ(H1N1)	IDWR Week 49 2009; 11(49) p.15	WHOは2つのオセルタミビル耐性H1N1ウイルス感染患者のクラスター報告を受けた。いずれも病院内における同じ病棟内で発生しており、免疫不全、あるいは高度の免疫抑制状態にある患者に感染がおき、耐性ウイルスのヒト-ヒト感染が疑われている。抗ウイルス薬投与中の薬剤耐性ウイルス発生は、季節性インフルエンザで明らかとなっているが、パンデミック(H1N1)2009においても観察された。現在、院内感染経路の特定、医療従事者や入院患者、院外への感染拡大について確認作業中であるが、これまでの結果は安心できるものである。
20	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2010 January 14	デンマークにおけるパンデミックインフルエンザA/H1N1ウイルス(2009): 発生日 2010年1月4日、最初の確定日 2010年1月9日、報告日 2010年1月9日、原因 パンデミックインフルエンザA/H1N1ウイルス。2010年1月4日にRingsted JystrupおよびHolbaek TolloseでパンデミックインフルエンザA/H1N1ウイルスのアウトブレイクが発生した。各々、飼育数ブタ3,200頭、確定例はブタ720頭、死亡例0頭および飼育数ブタ3,400頭、確定例はブタ950頭、死亡例3頭であった。
21	新型インフルエンザ(H1N1)	ProMED-mail 20100101.0014	中国AFCD(Agriculture, Fisheries and Department)は、2009年12月10日、地方牧場から集めたブタの鼻スワブ検体がパンデミックインフルエンザA H1N1に陽性であったことを確認した。1200頭のブタを飼育するこの牧場のブタ全頭にインフルエンザ様症状はなかった。AFCDは当該牧場のブタについて更に検査を始め、また、すべての地方ブタ牧場からサンプルを収集したが、これまでのところすべて陰性である。

22	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 September 18	英国におけるパンデミックインフルエンザA H1N1(2009)ウイルス: 発生日 2009年9月1日、最初の確定日 2009年9月16日、報告日 2009年9月18日、原因 パンデミックH1N1ウイルス(2009)。2009年9月2日にNORTHERN IRELANDでアウトブレイクが発生し、飼育頭数はブタ5,000頭、確定例はブタ4500頭、死亡例5頭であった。
23	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 October 27	アイスランドにおけるパンデミックインフルエンザA H1N1(2009)ウイルス: 発生日 2009年10月24日、最初の確定日 2009年10月27日、報告日 2009年10月27日、原因 パンデミックH1N1ウイルス(2009)。2009年10月24日にGULLBRINGUでアウトブレイクが発生し、飼育頭数はブタ4,500頭、確定例はブタ10頭、死亡例0頭であった。
24	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 November 26	インドネシアにおけるパンデミックインフルエンザA/H1N1ウイルス: 発生日 2009年8月27日、最初の確定日 2009年9月15日、報告日 2009年11月26日、原因 パンデミックインフルエンザA/H1N1ウイルス。2009年8月27日にKEPULAUAN RIAUでパンデミックA/H1N1ウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ250,000頭、確定例は不明、死亡例0頭であった。
25	新型インフルエンザ(H1N1)	CCDR Weekly 2009; FluWatch (Week35)	カナダPHAC(Public Health Agency of Canada)によるパンデミック(H1N1)ウイルスの監視と疫学調査の週間報告である。2009年8月30-9月5日の週は、全体のインフルエンザ活動の傾向は先週と同様の活動性を示し、ILI診察の割合は一年のこの時期の予想よりわずかに高かった。パンデミック(H1N1)2009のピークは6月の最初の3週間であった。罹患数においてはパンデミック(H1N1)2009の勢いは低く、この週の入院数は11例および死亡2例が報告された。2009年9月5日現在、入院総数は1,445例、285例はICUに入院し、パンデミックが起こって以来死亡総数は74例となった。また、パンデミック(H1N1)2009は全州および準州に広がったが、これまで入院症例の約90%および死亡症例の85%以上は4州(AB, MB, ON, QC)から報告されている。2歳以下の子供、妊娠女性、疾患のある65歳以下の人および先住民は、入院する割合が高くなると重症化するリスクが大きい。
26	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 December 23	韓国におけるパンデミックインフルエンザH1N1: 発生日 2009年12月14日、最初の確定日 2009年12月14日、報告日 2009年12月23日、原因 パンデミックインフルエンザH1N1ウイルス。15のアウトブレイクが2009年14, 16, 18日に発生し、総計で疑い例はブタ23,691頭、確定例はブタ241頭、死亡例は0頭であった。
27	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2010 January 27	セルビアにおけるパンデミックインフルエンザA H1N1(2009): 発生日 2010年1月18日、最初の確定日 2010年1月25日、報告日 2010年1月25日、原因 パンデミックH1N1ウイルス(2009)。2010年1月18日にSRBIAでパンデミックH1N1ウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ10,830頭、確定例はブタ20頭、死亡例0頭であった。
28	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 December 17	タイにおけるインフルエンザA/H1N1ウイルス: 発生日 2009年12月4日、最初の確定日 2010年12月14日、報告日 2009年12月14日、原因 インフルエンザA/H1N1ウイルス。2009年12月4日にSARABURIでインフルエンザA/H1N1ウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ680頭、確定例はブタ34頭、死亡例0頭であった。
29	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 November 5	台湾におけるA/H1N1インフルエンザウイルス: 発生日 2009年10月19日、最初の確定日 2009年11月2日、報告日 2009年11月5日、原因 A/H1N1インフルエンザウイルス。2009年10月19日にTAI-TUNGでA/H1N1インフルエンザウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ3,346頭、確定例はブタ160頭、死亡例0頭であった。
30	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 December 17	中国におけるインフルエンザA/H1N1ウイルス: 発生日 2009年10月28日、最初の確定日 2009年11月19日、報告日 2009年12月11日、原因 インフルエンザA/H1N1ウイルス。2009年11月25日にBEIJINGでインフルエンザA/H1N1ウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はイヌ52頭、確定例はイヌ2頭、死亡例0頭であった。
31	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2010 January 9	デンマークにおけるパンデミックインフルエンザA/H1N1ウイルス: 発生日 2010年1月4日、最初の確定日 2010年1月9日、報告日 2010年1月9日、原因 パンデミックインフルエンザA/H1N1ウイルス。2010年1月4日にEast, RingstedでパンデミックインフルエンザA/H1N1ウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ3,200頭、確定例はブタ720頭、死亡例0頭であった。
32	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 December 10	ドイツにおけるインフルエンザウイルスA H1N1: 発生日 2009年11月21日、最初の確定日 2009年12月3日、報告日 2009年12月10日、原因 インフルエンザウイルスA H1N1。2009年11月21日にRHEINLAND-PFALZでインフルエンザウイルスA H1N1のアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ425頭、確定例はブタ2頭、死亡例2頭であった。
33	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2010 January 20	日本におけるパンデミックインフルエンザH1N1(2009): 発生日 2010年1月12日、最初の確定日 2010年1月12日、報告日 2010年1月20日、原因 パンデミックインフルエンザH1N1(2009)。2010年1月12日にYAMAGATAでパンデミックインフルエンザH1N1(2009)のアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ2,445頭、確定例はブタ164頭、死亡例0頭であった。
34	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 November 3	米国における2009パンデミックA/H1N1インフルエンザウイルス: 発生日 2009年10月22日、最初の確定日 2009年11月1日、報告日 2009年11月3日、原因 2009パンデミックA/H1N1インフルエンザウイルス。2009年10月22日にINDIANAで2009パンデミックA/H1N1インフルエンザウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ3,000頭、確定例は不明、死亡例0頭であった。

35	新型インフルエンザ(H1N1)	OIE 2009 December 24	ロシアにおけるパンデミックインフルエンザA/H1N12009ウイルス: 発生日 2009年11月10日、最初の確定日 2009年12月3日、報告日 2009年12月23日、原因 パンデミックインフルエンザA/H1N12009ウイルス。2009年11月10日にCHUVASHSKAYA RESPUBLIKAでパンデミックインフルエンザA/H1N12009ウイルスのアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ10,625頭、確定例はブタ45頭、死亡例0頭であった。
36	新型インフルエンザ(H1N1)	Clinical Infectious Diseases 2010; 672-678	重症パンデミック2009インフルエンザA(H1N1)ウイルス感染とイムノグロブリンG2(IgG2)欠損との関連を調査するため、H1N1感染患者集団におけるIgGサブクラスのレベルを調べた。H1N1感染患者を、重症・中等度・健康妊婦に分類し、各群の血液サンプルを比較した。統計学的に有意な低アルブミン血症、貧血、総IgG・IgG1・IgG2レベル低下が重症H1N1感染患者に認められ、これらのレベル低下と重症H1N1感染と関連が示された。多変量解析後にも低アルブミン血症と平均IgG2レベルについて有意差が見られた。IgG2欠損患者を対象に平均90日間の追跡調査を実施したところ、低アルブミン血症はほとんどの患者で解消していたが、IgG2欠損は解消しなかった。健康妊婦では軽度のIgG1/IgG2低下が認められたが、H1N1感染妊婦ではIgG2レベルが有意に低かった。
37	新型インフルエンザ(H1N1)	Eurosurveillance 2010,15(9): pii=19498	2009-2010年のノルウェーにおいて、2009年パンデミックインフルエンザA(H1N1)ウイルスのhaemagglutinin HA1に変異のあるD222Gが死亡および重症症例に頻りに認められたが、中等度の症例では事実上認められなかった。この差異は統計的に有意であり、本結果は、この変異と臨床症状間における因果関係と一致している。本報告は、重症例の転帰と関係のあるパンデミックウイルスにおける変異の特定を行った最初の報告である。一方、非重症症例においても、実際に変異ウイルスが非常に低い頻度で流行しているかを判断するために軽症の症例を対象とした調査が必要である。
38	新型インフルエンザ(H1N1)	Emerging Infectious Diseases 16(4): 722-723 April 2010	日本血液センターは献血後にインフルエンザA/パンデミック(H1N1)2009感染の可能性のある血液製剤につき、NAT(nucleic acid amplification technology)を用いてウイルス遺伝子を検査した。献血後7日以内にインフルエンザの症状を示した96人の供血者から血漿96検体および赤血球67検体を検査した結果、パンデミック(H1N1)2009ウイルスはどの検体からも検出されなかった。パンデミック(H1N1)2009ウイルスにおけるウイルス血症が非常に低いためNATで検出されない、あるいはウイルス血症を同定するには確認期間が短いことが示唆される。
39	新型インフルエンザ(H1N1)	Atlanta health, diet and fitness news (2009 October 29)	米国においてタミフル耐性H1N1ウイルスがヒト-ヒト間で伝播した初めての症例が報告された。2009年6-7月、ノースカロライナ州でキャンプ中の65人にH1N1感染のため、600人には予防目的でタミフルが処方された。同じキャンプ内の2人の女性は、タミフル服用後の症状が現れ、2ヶ所に異なるウイルスが検出され、薬剤耐性であった。このウイルスは、検査した他のヒトには検出されなかった。問題は、1人の女性からもう1人の健康なキャンプメイトにウイルスが伝播したことであり、予防目的で健常者がオセルタミビルを服用することは、耐性獲得のリスク増加に繋がるかもしれない。予防目的の場合、抗ウイルス薬の代わりにH1N1ワクチンが有用であると考えられる。
40	新型インフルエンザ(H1N1)	Norwegian Institute of Public Health (2009 November 20)	ノルウェーで新型インフルエンザ陽性であった患者3例に、インフルエンザA(H1N1)変異株が検出された。パンデミックインフルエンザのサーベイランスの一部として患者数人のウイルスを解析した結果であり、これまでもいくつかの変異株が検出されているが、注目した変異株は新型インフルエンザA(H1N1)感染による死亡2例から検出された。この2例はノルウェーで新型インフルエンザ由来で死亡した最初の2例であり、その後、死亡例からの変異株の検出はない。この変異は、気道のより深部に感染し、その結果重篤化を引き起こす可能性がある。ノルウェイ人症例から確定された約70のウイルスを解析し、3例の患者からの変異株を検出した。この変異株は集団に流行はしておらず、自然発生した可能性があり、ワクチンや抗ウイルス薬の効果に及ぼす影響はない。
41	新型インフルエンザ(H1N1)	BBC News (2009 November 20)	英国では(2009年11月20日現在)、ブタインフルエンザのタミフル耐性株が入院患者の間で広まっている。University Hospital of Walesの重症患者を処置しているユニットで5例の患者が感染した。2例は回復し退院したが、1例は集中治療を受け、2例は病棟で治療中である。当局によると、他の患者への影響はなく、原因究明中である。院内感染はこれまでに3例あるが、タミフル耐性株のヒト-ヒト感染が初めて確認された症例である。
42	新型インフルエンザ(H1N1)	ProMED-mail 20091020.3600	パンデミックH1N1インフルエンザウイルスが米国内のブタで初めて確認されたとUSDA (U.S. of Agriculture Department)は発表し、また、食用ブタが感染しても屠殺はせず、ブタ肉製品からこのインフルエンザに罹ることはなく、食べても安全であると報告した。感染が確認されたブタはミネソタ州フェアアに出品されており、このフェアに参加した4例の10代若者がH1N1ウイルス陽性と診断された。USDAは、現時点で収集した情報によると、この若者はフェアのブタに接触したことで罹患したのではないと報告した。
43	新型インフルエンザ(H1N1)	ProMED-mail 20091202.4111	米国Virginia州で養殖用七面鳥の群れにパンデミックH1N1が検出され、米国農務省(US Agriculture Department)は米国内における七面鳥では初症例であると報告した。カナダとチリでは報告がある。インフルエンザ様症状のあった作業員から七面鳥に感染した可能性が報告されている。
44	新型インフルエンザ(H1N1)	ProMED-mail 20091228.4372	米国では2ヶ所のNorth Carolina農場におけるブタから採取した検体において、新型H1N12009インフルエンザウイルスが検出された。いずれの農場でも、ヒトからブタにウイルスが感染したと報告され、インフルエンザウイルスに感染後回復したブタ由来の豚肉を食べても安全である。ブタに新型H1N1インフルエンザが確認された州は他に3州あり、また、ネコ、フェレット、七面鳥、イヌおよびチーターにおいてウイルスが検出されているが、すべてヒトからの感染である。

45	新型インフルエンザ(H1N1)	Eurosurveillance 2010;15(16): pii=19546	スコットランド西部におけるパンデミックインフルエンザA(H1N1)に感染した、コミュニティ患者および重症患者に対し、HA (haemagglutinin)遺伝子のD222G(222番目のアミノ酸がアスパラギン酸からグリシンへ変異している)について解析を行い、更に、重症患者のうち死亡例と回復例について検討した。その結果、D222Gの発現率は、死亡例では8.7%(2/23例)に対し、コミュニティ患者および回復例では0%(0/35例)であった。また、D222N(アスパラギン酸→アスパラギン)の発現率は、死亡例および回復例では6.2%(2/32)であったが、この変異の重要性は不明である。D222G変異を持つ死亡患者のうち1例は、D222(変異なし)およびD222Gが混在していたが、この同一患者から再び採取した他の2サンプルからは、D222Gのみ及びD222Gが検出され、当該患者は混在した変異を持つウイルスに罹患した事を再確認した。
46	新型インフルエンザ(H1N1)	WHO Pandemic (H1N1) 2009 - update 101	WHOによるパンデミック(H1N1)2009に関する週間報告であり、世界の各地域の感染状況について更新された。パンデミックインフルエンザH1N12009の確定症例が214ヶ国を超える国から報告され、この中には死亡18097例が含まれている。状況は前回から大きな変化はなく、パンデミックインフルエンザウイルス感染の最も活動している地域は地中海および東南アジアであり、南北半球の温帯地域では低く散発的である。中央アフリカではB型季節性インフルエンザ感染が増加しており、すべてのインフルエンザ分離株の85%に達している。インフルエンザB型はアジアおよびヨーロッパの一部で低いレベルでの検出が続いており、現在、中央アメリカで報告がされている。
47	新型インフルエンザ(H1N1)	CDC FluView 2009-2010 Influenza Season Week 19 ending May 21, 2010	米国CDCは、Week 19(2010年5月9-15日)における国内インフルエンザ活動が減少した事を報告した。検査の後、インフルエンザ部門に報告された検体14(0.9%)がインフルエンザ陽性であり、CDCに報告されたインフルエンザウイルスのすべてが2009年インフルエンザA(H1N1)ウイルスであった。また、肺炎およびインフルエンザに起因する死亡の割合はepidemic thresholdを下回り、インフルエンザに罹患した小児の死亡例は報告がなかった。インフルエンザ様症状で来院した患者の割合は0.8%であり、全国基準の2.3%を下回り、調査対象である10の全地域についても地域の基準を下回った報告であった。
48	鳥インフルエンザ	Virus Genes. 2009 Aug;39(1):76-80.	トリインフルエンザH5N1ウイルスの感染者における組織分布および肺以外の臓器での複製能を調査するため、感染患者の剖検を実施した。ウイルス量は脾臓に比べて肺で最も多く、心臓・肝臓・腎臓・大小腸または脳ではウイルスは検出されなかった。また、ウイルス量は右肺に比べて左肺でより多く検出され、左肺の病理組織により重篤な損傷が認められた結果と一致し、また、左肺組織には+/-鎖双方のウイルスRNAが存在した。一方、低ウイルス量であった脾臓には+鎖ウイルスRNAは認められず、循環血液などによって運ばれた可能性が示唆される。
49	鳥インフルエンザ	PLoS Pathogens 5(12): e1000709; 2009 December	2003年以来、H5N1トリインフルエンザウイルスのヒト感染例は400例を超え、60%以上の死亡率である。ほ乳類のモデルとしてモルモットを用い、6種類のH5N1トリインフルエンザウイルスの感染実験を行った結果、2種類のウイルス(DKXG/35およびBHGQH/05)は接種動物から未接種動物へ伝播した。変異実験からPB2蛋白の701番目に位置するアスパラギンがモルモットにおけるDKXG/35の感染に必須であり、HA(hemagglutinin)蛋白におけるアミノ酸変化(158-160番目の糖化の欠損)はシアル化グリカンへのHA結合を招き、モルモットにおけるH5N1ウイルス感染にとって必須条件であった。PB2およびHAにおけるアミノ酸の変化は、H5N1株がパンデミックを起こす可能性を評価する重要な分子マーカーとなるかもしれない。
50	日本脳炎	日本ワクチン学会第13回学術集会(2009 September 26-27) 1A-C-6	国内におけるヒトおよびブタのJEV(日本脳炎ウイルス)に対する中和抗体(NT価)および赤血球凝集抑制抗体価(Hi価)が測定され、日本脳炎抗体保有状況が報告された。本報告は、2008年度感染症流行予測調査(11都道府県の約3,200人および35都道府県のブタ約5,000頭を対象)に基づいて実施された結果である。ヒトにおける抗体保有率(NT価1:10以上)は1-5歳:20%未満、8歳:70%、9-20代前半:80%以上、20代後半以降から激減し、40-50代:30%未満であった。また、3-4歳(標準的接種年齢)では2004年度には62.0%であったが、2006年度以降激減し、感受性者の蓄積が認められた。今後、定期予防接種対象年齢および2005年5月に発令された「動差差し控え」期間に接種を受けなかった者などにつき、抗体保有率の向上が望まれる。
51	日本脳炎	日本ウイルス学会第57回学術集会(2009 October 25-27) 2P145	富山県内の蚊(21ヶ所で捕集した48プール)およびブタ血清(4ヶ所で採取した9検体)における日本脳炎ウイルス(JEV)分離および分離株の遺伝学的解析が報告された。JEVの検出時期と蚊の発生消長を比較した結果、豚舎では、蚊の発生後JEV陽性率が上昇し、牛舎では、豚舎よりJEV陽性率は低く、時期は一致する傾向にあった。アイカイカの発生しなかった2006年にはJEVは分離されなかった。また、EおよびpM領域の遺伝子解析の結果、いずれの分離株もGenotype型であった。
52	狂犬病	ProMED-mail 20100119.0212	米国Prince George's Countyの小・中学生教育用農場で6週齢の仔牛1頭が狂犬病陽性を示した。この感染した仔牛に接触したヒトは、電話をしてくるよう当局は依頼している。
53	狂犬病	CDC/MMWR 2010; 59(7): 185-190; 2010 February 26	2009年米国テキサス州で、17歳の少女が狂犬病の不感感染と診断された初の症例報告であり、病気の診断に複数回入院したが、集中治療を受けることなく回復した。人畜感染症である狂犬病は、発病後に文書化された証拠のある回復例は世界で6例であり、5例は感染前に予防接種を受けていた。当該患者は、頭痛・喉嚨所恐怖症などのため入院し、症状の回復により退院したが、頭痛の再発により他院を受診し、感染性脳炎が疑われ、入院した。頭痛発症の2ヶ月前にコウモリと接触していた事から、CDC (Centers for Disease Control and Prevention)にて検査を行った結果、血清および脳脊髄液に狂犬病ウイルス抗体陽性が認められたため、狂犬病ワクチンおよびヒト狂犬病免疫グロブリンが投与され、回復・退院した。